

## 羅宗強著 『隋唐五代文学思想史』

静永, 健  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9687>

---

出版情報：中国文学論集. 22, pp.103-113, 1993-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：



羅宗強著『隋唐五代文学思想史』

静 永 健

羅宗強著『隋唐五代文学思想史』は、一九八六年八月、上海古籍出版社より刊行された、四九〇頁、約三万六千字の著作である。

著者羅宗強氏は、現在、中国南開大学中文系教授。近著に『玄学与魏晋士人心態』<sup>(1)</sup>があり、同書附録の著者紹介に拠れば、氏は広東揭陽の人、一九三一年生まれ、本稿所評の該書のほか、『李杜論略』<sup>(2)</sup>『唐詩小史』<sup>(3)</sup>および『中国古代文論研究概述』(主編)『隋唐五代文学史』(共著)等の著作があり、また、評者(静永)の知り得た限りでは、研究論文として「清水出芙蓉 天然去雕飾——李白審美理想蠱測」<sup>(4)</sup>「渾涵汪洋 兼取併蓄——杜甫文学思想芻議」<sup>(5)</sup>「詩歌史上的双子座——李白与杜甫」<sup>(6)</sup>「評『中国文学理論批評史』——兼論中国文学批評史研究中的一些問題」<sup>(7)</sup>「論大曆初至貞元中的文学思想」<sup>(8)</sup>「詩的実用与初期的詩歌理論」<sup>(9)</sup>「論唐貞元中至元和年間尚怪奇重主觀的詩歌思想」<sup>(10)</sup>「牛希濟的『文書論』与唐末五代倡教化的文学主張」<sup>(11)</sup>「從思維形式看中国古代詩論的一個特点——对“象外之象”說的一種考察」<sup>(12)</sup>「古文運動何以要到韓柳出来纔開瞭新局面」<sup>(13)</sup>「唐代古文運動的得与失」<sup>(14)</sup>および「論阮籍的心態」<sup>(15)</sup>「正始玄風与正始文学思想」<sup>(16)</sup>等、主に隋唐五代さらにそれ以前の文学または文学理論に関する論考を数多く発表しておられる。該書は、かかる氏の研究の一集成であり、現在の中国における隋唐五代文学研究ならびに文学理論史研究として、恐らく屈指の成果と評せらるるもの一つである。<sup>(17)</sup>それは、該書の論述形態が従来に類似著作には見られなかつた幾つかの新しい方法に拠って構成されていること、また同時に、その内容が全般に亘って詳細かつ勉めて客観的な資料分析に基づき、数々の創見に富んだ著作であることに拠る。

このことは、まず該書の「文学思想史」という書名を以て窺い知ることができる。該書が単に「文学史」と銘打

羅宗強著『隋唐五代文学思想史』(静永)

たず、かかる題名を採ぶ所以は、既刊の書名を憚ってというような瑣末な事情に拠るものではなく、著者自身の創意に基づき、実に積極的な意味合いが込められているからなのである。

著者は、その「引言」の冒頭、該書を次のように規定している。

本書の撰述目的は、隋唐五代約三八〇年間における文学思想の發展状況と、その發展法則の説明にある。

(一頁)

すなわち該書の目的は、隋唐五代のさまざまな文学史的事項および主要作家の概述にあるのではなく、言わば流れとしての〈文学思想〉の發展状況およびその法則性の究明に存するのであり、これは、従来その繁多な事項説明の羅列により「受験参考書」とまで酷評される他の多くの「文学史」の著作とは、截然たる區別を持つものなのである。

また該書は、単なる「文学史」の著作でないと同様、これまでも幾つか刊行されてきた「文学批評史」あるいは「文学理論發展史」類の著作とも本質的に異なるものである。つまり、ここに著者が用いる〈文学思想〉という語の含義は、鍾嶸『詩品』や劉勰『文心雕龍』等に代表される〈文学批評〉または〈文学理論〉の著作物の研究を当然包含するが、更に加えて、各時期に創作された文学作品とそこに反映されている作者の文学に対する考え方、すなわち著者の言に拠れば「文学の社会的効果と芸術の特質とに対する作者の認識、作者の審美理想および過去の文学作品に対する態度とその摂取、芸術技巧の追求、芸術形式の探求」(二頁)等をもその考察の対象として包括するものである。従って該書に取り上げられる作品および作家は、唐太宗「晋書陸機伝論」や魏徵「隋書文学伝序」あるいは殷璠『河岳英靈集』、皎然『詩式』等、代表的な文学批評および文学理論の著作は勿論、王維、孟浩然、岑参、韋応物といった、理論面では殆ど明確な記述を残していない詩人達の作品まで、隋唐五代三八〇年間の文学動向を遍く捉えたものとなっている。言わば該書は、「文学史」でも「文学理論批評史」でもない代わりに、また、その両方の視点を兼ね備えた著作、ということにもなるのである。

では以下に、該書がその「文学思想史」という立場から採用した新しい試みおよび方法論について、実際にその幾つかを取り上げて分析してみることとしよう。

\*

まず第一には、該書撰述の構成、つまり唐二九〇年間の時期区分のあり方が挙げられる。すなわち該書は、次に列記する通り、都合十二の章を以てその著述が展開されているのである。

- 第一章 隋代文学思想
- 第二章 初唐（高祖武徳初至睿宗景雲中）文学思想
- 第三章 盛唐（睿宗景雲中至玄宗天宝初）文学思想
- 第四章 転折時期（玄宗天宝中至代宗大暦中）文学思想（上）
- 第五章 転折時期（代宗大暦中至徳宗貞元中）文学思想（下）
- 第六章 中唐（徳宗貞元中至穆宗長慶末）文学思想
  - 上篇：文体文風改革的思潮和理論建樹
- 第七章 中唐文学思想
  - 中篇：尚美・尚俗・務尽的詩歌思想
- 第八章 中唐文学思想
  - 下篇：尚怪奇・重主観的詩歌思想
- 第九章 晚唐（敬宗宝曆初至宣宗大中末）文学思想（上）
- 第十章 晚唐（懿宗咸通初至昭宣帝天祐末）文学思想（下）
- 第十一章 五代文学思想

羅宗強著『隋唐五代文学思想史』（静永）

このうち、ここで特に注目されるのは、中間第四、第五章に設けられた「転折時期文学思想」という章節である。この二章は、内容的には前者に主として杜甫、元結および『篋中集』の詩人達を、後者に韋応物、劉長卿また「大曆十才子」と呼ばれる詩人達、それに皎然『詩式』における詩歌意境論の出現等を、それぞれ考察し論述するものである。従来、唐代の文学史的時期区分は、明の高棟『唐詩品彙』が提唱する「初盛中晩」の四分期説に従い、元結や杜甫は盛唐に、また韋応物、劉長卿等は中唐詩人群の一部に繰り込まれるのが通例であった。しかし、ここに敢えてこのような章節が設けられた理由は、先にも述べた通り、該書の著述目的が全く以て〈文学思想〉の發展状況の分析に存するためであり、言い換えれば、著者の視点が杜甫、韋応物といった個々の作家の作品よりも、それらの全てを含んだ〈文学思想〉の流れにこそ据えられているためだと考えられるのである。

またこれは、それに先行する盛唐期の概念規定と考え合わせるにより一層明白となる。

一般に盛唐とは、玄宗即位の開元初年を以て開始とし、安史の乱勃発の天宝末年、あるいは王維、李白そして高適、岑参、杜甫等が相次いで世を去る代宗の宝応、永泰年間乃至は大暦初年を以て終わったと考えるのが通例である。しかるに該書では、先の表題中に示された通り、睿宗の景雲年間に始まり、玄宗の天宝初年を以て早々と終止符が打たれている。思うにこれは、著者のこの「文学思想史」という考え方の、恐らく最も躍如たる部分であろう。すなわち著者は、政局の変動、社会の変化に伴う知識層（士大夫）の心理状態の推移を第一の基準として該書の論述を進めているのである。周知の如く、盛唐は唐朝創業後既に百年餘の歳月を経、政治的経済的また文化的にまさに空前の繁栄を遂げた時期である。しかしこの時期は、著者も明言する通り、繁栄と同時に社会の様々な矛盾が漸次顕在化し、特に開元二十四年以後、李林甫、楊国忠相次いで朝政を掌握するに及んでは、社会の矛盾や政界の権力闘争等が急速に激化、やがて引き起こされる安史の乱によって一気に「唐代社会の盛から衰への転換点」（一一九頁）を迎えた時期でもあったのである。著者は、社会のこうした情勢が文学にもそのまま反映し、「盛唐文学の精神特質である高揚した感情基調と満ち溢れる自信は、戦乱の悲惨な現実生活のムードに次第次第に取って代わられることになった」（一一九頁）と考へ、この天宝初年を以て盛唐を一旦締め括り、杜甫、元結等の社会詩の登場

と、そして韋応物、劉長卿等の寧靜淡泊な詩境の追求とを、それぞれ次の中唐文学への「転換点」として、別個の新しい時期区分において論述しているのである。この分期法は、隋唐五代の政治や社会の動きがその「文学思想」にどのように関わっているのか、という著者の問題意識の最も本質的な部分に繋がるものであり、説の妥当性もとより、該書の論旨を明瞭かつ極めて説得力あるものにしていてと考えられる。

さて、唐代のかかる時期区分に続き、該書はまたその各章各時期の論述に当たっても従来とは異なる新しい方式を取り入れている。すなわち各段落において該書は、やはり人物を中心とするのでなくその「文学思想」中心の論述方針を貫いているのである。

例えば、先にも触れた第三章「盛唐文学思想」においては、第一節「風骨の崇尚」、第二節「興象玲瓏たる詩境の追求」、第三節「自然体による美の追求」という三つの表題によって段落が構成されている。これは、従来の孟浩然、王維、李白……といった各詩人別の列伝的論述方法とは全く異なるものである。しかもここで特筆に値するのは、この三つの「文学思想」が、盛唐の多種多様な詩人達それぞれが持つ幾つかの創作傾向のうち、その代表的なものとして任意に摘出されたのではなく、この時期に活躍した全ての詩人に貫流する、言わば共通認識として提出されていることである。いま、この第三章を見るに、王維、孟浩然、李白、岑参の四詩人の作品は、特に三段落のそのいづれにも用例として取り上げられている。数多く、かつ各々に個性的な盛唐詩人達の作品を一括し、「風骨」「興象玲瓏」そして「自然体」という三項目を以てその本質をまとめ上げたのは、従来に無い著者独自の見解であり、今後の盛唐詩研究においても注目されるべき一説と言えよう。

該書は、あくまでも隋唐五代間における流れとしての「文学思想」に論述の焦点を絞り、このように個々の文学史的事項の概説よりも各時期の創作傾向の集約的把握にその目的が置かれている。従って、これまでに無い新しい角度からの分析が著作中随処に試みられるのも、あながち偶然とは言えないのである。他にも例えば、初唐の陳子昂に関して著者は、従来的一种英雄的できえあつたその文学史上の突出した位置付けに疑問を持ち、その登場には「必然的な社会的歴史的原因があり、他の文学思想との継承関係がある」（六六頁）ことを主張する。そして、陳と同時期の史学者劉知幾の『史通』に着目し、そこに論じられる史書の実録思想との相似関係を通じて、当時存在

した写実主義の風潮が陳劉双方に影響したとの大胆な仮説を立て、彼等の理論をその当時の思想的背景から必然的に導き出そうと努めている。また、第六章の唐代古文運動についての論述では、豊富な例証と先秦以来の散文文体の発展史とを踏まえた上で、まず初盛唐期の古文運動における三つの弱点を(1)「理論と実践との乖離」、(2)「駢文の先進性の一方的否定」、そして(3)「獨創性の欠如」として挙げ(二三一―二三四頁)、それらが韓愈、柳宗元においてどのように克服されていったかということが一つ一つ述べられている。すなわち該書では、中唐期に勃興した韓柳の古文運動というものが、著者独自の見解によって実に整然と、かつ文学自体の発展法則を見据えつつ合理的に説明されているのである。該書は、一つの体系としてまとまった「文学思想史」としてのみならず、またその独自の観点より発して、各文学史上の問題点に関する珠玉の論文集としても幾多の創見に富む著作となっているのである。

\*

さて、ここで更に見逃すことのできないのは、該書のかかる新見解の提出が、上述の通り、隋唐五代を一つの連続した流れとして見る著者のグローバルな文学史的視野に立脚するものであると同時に、当然ながら、個々の作品に対するきめ細かな読解をもその基礎としていることである。

該書には、引用作品の豊富さも然ることながら、そうした個々の作品についての著者の綿密な解釈も幾つか示されている。そのうち、該書中特に精彩を放つと思われるのが、李白、杜甫、韓愈そして李商隱の各作品についての論述部分であるが、ここでは例として第九章の李商隱の絶句についての解釈を評者の拙訳によって掲げたい。

昨夜

不辭鵝鳩妬年芳 辭せず 鵝鳩の年芳を妬むを

但惜流塵暗燭房 但だ惜しむ 流塵暗燭の房

昨夜西池涼露滿  
桂花吹斷月中香  
昨夜 西池 涼露滿ち  
桂花 吹き断くす 月中の香

(『玉溪生詩集箋注』卷二)

鷓鴣はとびが春分に鳴けばよろずの花は咲き、秋分に鳴けばよろずの花は凋んでしまふ。秋の鷓鴣のさえずりと過ぎ往く光陰への嘆息。これが一つの感情層をなしている。万物の移ろい変化することが引き起こす心の動揺である。だが、つとめて気を取り直し、時が流れ過ぎようとも意に介さない。だから「辞せず」と言っている。あり、これがまたもう一つの感情の層をなしている。しかし「妬」の一字には、また暗に自己の境遇に対する感慨が含み隠されてもいる。年芳が鷓鴣の妬むところとなるのは、自己の優れた才能の他人からそねみ憎まれるに似て、これもまた一つの感情の層をなしている。これはある物事から引き起こされる連想である。そしてまた強いて気を紛らわせ、妬まれることも決して「辞さない」。これが第四の感情の層となるものである。とはいへ、歳月が流れゆこうとも、芳草が枯れ凋んでしまおうとも、また己の才能が遂に人に知られずに終わろうとも、これらはみな自分が心の底から深く思い悩んでいるものではない。ただ惜しむべきは我がいのちの老い衰えゆくこと——「但惜流塵暗燭房」。一年の生氣は徒らに流塵の中にうち捨てられ、衆芳は凋落し泥となり土と化してゆく、これは人のいのちの日々老い衰え、過ぎ往く歳月の中に死を迎えんとするに等しいものである。時節の移ろいはやはり引き留められはしないのだ！これが第五の感情の層をなしている。やがて詩は意識の中の感傷嘆息からまた眼前の景へと戻る。いづれにせよ秋露は既に降り、今年もまた暮れ終わろうとしている。いのちの漸次老い衰えゆくことは愈々その哀傷を増してゆき、もはや引き戻せはしない。これが第六の感情の層をなしている。最後に詩は人間世界から天上界の幻想へと誘うが、たとえ天上界であろうとも、流れ往く歳月への感傷は免れざるものなのである——「桂花吹斷月中香」。これが第七の感情の層である。昨夜秋露が降りたことより発した生命の日々の衰老に対する感傷は、このようにくねくねと折れ曲がった線を描き、その感情を一層更に一層と積み重ねている。これが李商隱の追求した細微幽約の美の一例と云うことができる。彼の感情の流れは、彼が心を込め一つ一つ選り抜いた極めて飛躍性に富むイメージの中で、七重八重とまるで



水流がうねり曲がるように紆余曲折し、人をして繰り返し咀嚼し味読せしめるのである。

(三六九～三七〇頁)

先にも述べた通り、該書の目的はその「文学思想史」の論述にある。しかし、かかる個々の作品に対する綿密な解釈が、著述に説得力を増し、該書にもう一つの大きな魅力を与えていることは、恐らく衆目の一致するところだと思われる。

\*

以上述べ来たった通り、該書は近年の隋唐五代文学研究ならびに文学理論史研究において、紛れもなく屈指の成果と評すべきものである。従来の方式に固執しない論述、数々の文学史的創見、また各作品についての綿密な解釈等、該書が提出するものはいずれも極めて新鮮であり、我々後学を啓発するところ少なくない。しかるに評者の愚考するところ、そこにはなお若干の課題も残されているように見受けられる。

例えば、第七章「尚実・尚俗・務尽の詩歌思想」について。

本章は言うまでもなく、中唐期における張籍、王建そして白居易、元稹等の社会風刺詩、およびその他口語体に近い平明な詩歌群を論じた部分である。著者は、彼等の文学思想が生民の疾苦を描写し、詩歌言語の通俗化を主張した点においてその積極的意義を認めている。しかしその全体的な評価は、同時期の韓愈、孟郊等の発憤著書説、不平則鳴説といった「尚怪奇・重主観の詩歌思想」に比べ、一様にかなり低いようである(三〇七頁)。ところで、元白等の創作活動と韓孟詩派とを分けるのは従来既に通説化した考え方ではあるが、盛唐期の詩人達の各特徴を見事に一本化し、改めて三つの要素に分析し得た著者の手腕より見るに、ここに來てのこの分裂は些か隔靴搔痒の感を禁じ得ない。思うに、韓愈等の発憤著書および不平則鳴の説と、元白の詩教説とは、文学の創作論と効用論の違い(創作時にあつての作者の心構えが前者、出来上がった作品の意味内容に求められるものが後者)とも言え、必ずしも同一平面上に論ぜらるべきものではなく、また、修辞上の怪奇と平俗の違いについても、ともに李白や杜甫

といった盛唐の文学成果を乗り越えんとする営為として同一視できるものとも考えられる。更に、その白居易の文学論について言えば、彼の主張するところは単なる功利主義的な諷諭説だけではなく、閑適、感傷という、功利とは全く正反対の考え方も併存させていることを忽視することはできない。かかる点、該書の論述にはなお再考の余地がのこされているように思われるのである。また該書には、主に中晚唐以降盛行し始める詞（曲子詞）、伝奇、あるいは俗講や変文等、所謂俗文学の分野に関する言及の少ないことも残念に思われる部分である。ただし、該書を通じてその「文学思想史」という著者独自の構想になお一点の不備があるとすれば、それは、個々の作品および作家間に微妙に存在する地域の差そして身分の差というものへの考察の欠落ではないだろうか。

隋唐五代の文学を一つの連続した流れとして捉えんとする著者の考え方にはもとより首肯されるものがある。しかし、南船北馬の喩の如く、中国にはその南北に歴然たる地域差が存在する。隋による統一が図られたとはいえ、都長安で書かれたものと、江南の金陵や揚州を中心として作られた作品との間には、質的におのずと差異が生じていた筈であり、また、作家間の身分差について言えば、禁裏において営まれた所謂皇帝貴族達主導の文学と、一般庶民の巷間の文学との間には、やはりおおきなズレがあったであろう。そして、科挙及第を目指す人々と既に及第した官僚達、更にはそこから逃れ、地方の節度使の帷幕中や故郷での閑居生活を送る人々の文学も、その各々の目的意識の相違から、幾何かの差異が生じていた筈である。窃かに思うに、該書における俗文学の分野に関する言及の不足や中唐文学についての幾つかの問題は、あるいはかかる視点からの分析によって補われるものではないだろうか。例えば、左遷や科挙落第等の不遇な状況の下、不平則鳴説によつて互いに励まし合ひしかなかった韓愈やその周囲の文人達と、既に官僚となり、その官場生活の軋轢から逃れるように創作に没頭した白居易等との関係は、単に派閥的な文学集団というよりも、その活動する基盤においてまず根本的な差異があったように考えられるのである。時代差、地域差、そして作家間の身分差（境遇差）、この三つの視点を考慮した更に立体的な「文学思想史」の構想は、該書のみならず今後の文学史、文学理論史研究の一つの大きな課題と言えるもののように思われる。

しかし、このような課題を残しつつも、従来の単なる事項羅列式の著述形態を打破し、かつ創作作品と理論著作の双方を結合して一つの連続した流れとしての「文学思想史」のあり方を確立した該書の功績は、決して過小に評

価さるべきものではない。該書は、今後の隋唐五代文学研究において我々が依拠すべき重要な示唆に富む好著として、高く評し得よう。

注

- (1) 一九九一年七月、浙江人民出版社刊。
- (2) 一九八〇年十二月、内蒙古人民出版社刊。
- (3) 一九八七年九月、陝西人民出版社刊。
- (4) 『古代文学理論研究』叢刊第一輯、一九七九年十二月、上海古籍出版社刊。
- (5) 『天津師院學報』一九七九年第三期。
- (6) 文史知識文庫『中国文学史百題(上)』一九九〇年十二月、中華書局刊。初出は『文史知識』一九八一年第一期。
- (7) 『中国社会科学』一九八二年第三期。該論文は敏沢著『中国文学理論批評史』(全三冊、一九八一年五月、人民文学出版社刊)についての書評である。
- (8) 『社会科学戦線』一九八三年第三期(総第二三期)。
- (9) 『文学遺産』一九八三年第四期。
- (10) 『古代文学理論研究』叢刊第九輯、一九八四年四月、上海古籍出版社刊。
- (11) 『天津社会科学』一九八四年第五期(総第一九期)。
- (12) 『社会科学戦線』一九八六年第一期(総第三三期)。
- (13) 『唐代文学論叢』総第七輯、一九八六年一月、陝西人民出版社刊。
- (14) 注(6)に同じ。初出は『文史知識』一九八八年第四期。
- (15) 『社会科学戦線』一九九〇年第四期(総第五二期)。

(16) 『文史知識』一九九〇年第六期。

(17) 評者の知る限りでは、中国国内において既に左の一篇が該書の書評として発表されている。

陳允吉・盧強「中国古代文学理論批評研究中的新收穫——評羅宗強『隋唐五代文学思想史』」(『中国社会科学』一九八七年第二期)

(18) 王維は肅宗の上元二年(七六一)、李白は翌代宗の宝応元年(七六二)、また高適は永泰元年(七六五)、岑參は大曆四年(七六九)十二月あるいはその翌年一月、杜甫は大曆五年(七七〇)、そして元結は大曆七年(七七二)に相次いで没した。

(19) この盛唐期の開始時について、該書は殷璠「河岳英靈集叙」の「景雲中、頗る遠調に通ず」という一句に根拠を置く(八九頁)。

(20) このことは、先掲注(17)の陳允吉、盧強両氏の書評中にも指摘されている。

#### 【追記】

一九九二年十一月、福建省廈門市において「中国唐代文学学会国際學術シンポジウム」が開かれ、その席上、評者は羅宗強氏に初めて面晤する機会を得、該書のことや最近のご研究について、氏の聲咳に接することができた。その折りの氏の言を要するに、中国の文学理論には、著作として明確に文章化されたものと、創作作品の中のみ実践的に表れ未だ文章化には至らないものがある。前者は主に儒家的な考え方であるのに対し、後者は老荘に基づいた考え方が多く含まれる。しかし両者は往々にして密接不可分な関係にあり、双方を等分に見据えた「文学思想」の研究が必要であるとのことである。該書の基本的な考え方として、読者の参考となるものであろう。なお、氏は現在、この考え方を更に各時代に推し広めた「中国文学思想通史」(全八巻)をご執筆中であり、その隋唐五代部分に関しては、李白杜甫について、晚唐文学思想について、および俗文学についての論述を更に補筆されることである。氏の研究の今後益々のご発展とご健康をお祈りし、ここに追記の一文を書き添えるものである。